

奈落の底から叫び続け
て

眼鏡掛け

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

突き落とされ、見下され、四肢の一つを奪われた。

それでも彼女は、生きると決めたのだ。

——これは、変わり果てた少女が、奈落から這い出る物語。

*

※原作主人公TS

※GL要素あり

以下二つが苦手な方には退避を推奨します。

また、基本的には原簿書籍版の一卷相当の予定ですので、予めご了承下さい。

目次

第1話 歪な世界	P r o l o g u e
12	1

Prologue

月曜日。

それは学生であれば誰もが憂鬱であつて然るべき曜日。

学校はこの日から金曜日までの五日間続き、その後は自由な土日の二日間が待っている。しかし、その二日が過ぎればまた五日間がやってくるのもまた事実。

それはさながら無間地獄のよう……とまではいれないが、兎にも角にもこの月曜日という物は憂鬱な物なのだ。特に、彼女にとっては。

「……………はああ」

若干なよなよしさを含んだ声で溜息を吐き、己が通う学校の廊下を歩く女子。

彼女の名前は南雲なぐもハジメ。

実は外国人の血も混じつてる混血だったり、実はとんでもない秘密を抱えていて謎の組織に追われていたり、実は少女マンガよろしく複数の男子に言い寄られていたり、実は自覚が無いだけで傍から見たら美少女だったり……なんて事ある筈も無い、平凡を絵に描いたような至つて普通の女子なのである。仮に『平凡な人ランキング』なん

て物があるものなら本選でいいトコロまで行きそうな位、オーラが無かった。むしろ普通なオーラが出てるまでである。

一応擁護するなら、彼女は別に不細工な訳ではない。身嗜みも特にだらしない部分は見当たらず、肩より下に伸びたセミロングの黒髪は年頃の女子らしくちゃんと手入れもされていて、肌も元々あまり運動しない為か色白だ。とはいえ、彼女本人にそのらの女子高生らしい一種の派手さという物が無く、目立とうとかもてようなんて気も無い為か、どうしても地味な印象がついてしまう。

ちなみにその両親について軽く触れると、母親は売れっ子の少女漫画家、父親はゲーム会社の社長である。無論、彼女がそんな二親の影響を受けてサブカルチャーに造詣が深くなるのは当然と言えば、まあ当然である。比率としてはゲーム全般に多少偏ってはいるものの、世間一般で言うオタクと言うには十分なレベルだ。

さて、ここまでの説明で、彼女があまり目立たない生徒であるのは何となくわかるだろう。本人が少しは女磨きに精を出していたり、或いは自身の趣味に関して過度に外面に出していれば話は別だが、彼女は遊びもイタイ言動も特にしていない。趣味に関しては隠していないが、かと言って進んで全面に押し出す必要も無い。学校以外の時間を趣味に費やす為部活にも入っていないので、むしろ普通にしていればそのまま一度も目立つ事なく三年間を終えていたはずだ。

にも拘らず、彼女は何故か、高校入学時から二年生である現在まで……もの見事に、悪目立ちしていた。

「……………はあああ」

またもや溜息を吐くハジメ。特に自分が何かした訳でも無いのに、何故こうなつてしまったのだろう、と。

かと言ってその原因本人に直接物申すわけにもいかないのです、どうしようも無いのは判り切つてはいるのだが。

とうとう教室に着いてしまい、覚悟を決めるように深呼吸して、入り口から室内に一歩踏み出した。次の瞬間目の前に現れたのは、

「おはよう、ハジメちゃん」

超が付く程の、文句無し的美少女だった。

「う、うん、おはよう。白崎さん」

「もう、香織でいいって言ってるのに」

うわあ、という言葉をどうにか呑み込み、どうにか返した挨拶への返事は、男女問わず魅了するであろうとびっきりの笑顔と、呼び方に対する不満であった。

ちなみに、ここでの『うわあ』は自分では戦うまでも無く惨敗を認めるしかない超絶美少女への感嘆を込めた『うわあ』ではなく、彼女が今日も齎すであろう自分への理不

尽に対する『うわあ』である。

そんなハジメの内心を知る由もなく、今も変わらず素敵な笑顔を浮かべるこの女子生徒の名前は白崎香織しろさきかおり。さつきも言ったが超絶美少女で、学校の二大女神の一人と称されるハジメのクラスメイトだ。

誰もが認めるであろう整った顔立ち。腰まで伸びた流れるような美しい黒髪。シミ一つ無さそうな美肌。鈴を鳴らすような綺麗な声。何処をとつてもパーフェクト。男女問わず学校中の人気を集めて止まない、正しく女神のような扱いを受ける生徒なのだ。

さて、そんな彼女が一介の女子生徒、しかも特に部活にも所属していない、地味めなおタク女子に毎日話しかけていたとしたらどうなるだろうか。

無論、周りの生徒、特に彼女のファンが黙ってはいない。そう、これこそがハジメの憂鬱の原因であり、学校中の視線に曝される事となった最大の要因である。

入学時から何故か頻繁に話しかけに来る彼女に、最初は戸惑ったし困りもしたが、不真面目な部分を見せていけばその内勝手に離れていくだろう、と考えていた。元々高校卒業後の進路を両親のどちらかの職場（どちらに転んでも即戦力になれる程には技術を既に身に付けている）に設定しているので、そこまで真面目に勉強する必要が無かった。そんな姿を見せていけば、彼女も呆れて自分に興味を無くしていくだろう、とハジメは

考えていたのだが……結果は御覧の有り様である。

今もやたら嬉しそうな香織と話している自分に、色々と煮詰めたような視線がクラス中から突き刺さっていた。「なんであんな地味ななんかと……」「白崎さんが気に掛けてくれているのに、どうして真面目になろうとしないの?」「視線だけで人を呪えたら……」etc.

むしろどうしてこんな地味な自分に学校のマドンナが親し気に話しかけてくるのか、未だに自分でもわからないというのに、こんな視線を学校にいる間中ずつと受ける自分の身にもなつて欲しい、と思わざるを得ない。その上肝心の本人はそんなハジメに対する露骨な視線には全く気付いていないのだから、もう堪ったものではないのだ。

更に不幸な事に、ハジメが学校中のヘイトを集めまくっているのは香織の所為だけでは無かつたりする。

「やあハジメ。また香織に世話を焼いてもらっているのかい?」

親しげな声で何処かズレた事を言う爽やかな声に、思わず頬が引き攣りそうになったのを頑張つて堪えるハジメ。自分の表情筋を手放して褒めたくなくなったのもすぐ引つ込み、教室の入り口にて後ろを振り向いた。そこにいるのは、これまた文句無しのイケメンと熊の様に体格の良い男子、それにポニーテールと切れ目が特徴的な美少女の姿。

「香織は本当にハジメの事を気に掛けているんだね」

「全くだぜ。毎度毎度、言っても聞かねえんならほつといてもいいと思うけどな」
「はあ……いつもごめんなさいね、ハジメ」

自分に対して三者三様な反応を示したのは香織とは幼馴染みで、学校では一緒にいない方が珍しいとすら言える同じみのメンバーである。

親しげに下の名前で呼んできたイケメンが天ノ河光輝。あまのがわこうきイケメンな上に成績優秀で、運動神経が良くてスポーツ万能な上、社交性もかなりあつて誰とでも打ち解ける、三拍子どころか何拍子揃つてんだと言いたくなる完璧超人だ。女子にも当然の如く大人気である。

さかがみりゅうたろう坂上龍太郎はその体格と一見不良っぽい見た目が特徴の体育会系。子供の頃から柔道をやっているらしく努力型である為か、傍からはぐうたらに見えるハジメには、露骨でもないしとてもとも言えないが少なからず良い感情は抱けない模様。

そして最後に、ハジメにとっては唯一の良心であり、この香織を含めた四人の中で最も常識人である八重樫やえがししずく雫。幼少期より剣道を嗜んでいて、その容姿は香織に負けず劣らずの美少女であり、学校の二大女神の一人である。常識人と言つた通り、他三人と違つてハジメに対する視線の事も気づいており、今も微笑みながら若干申し訳なさそうにしている。

こんな嫌でも目立つ面子が全員幼馴染みだというのだから、本当に世の中は侮れない

ものだ。全員が常に一緒にいる為、一人が誰かと話していれば他三人ももれなく付いてくるといふ豪華セットである。ここまで言えば分かるだろうが、要するに、香織がハジメの事を構う所為でこのメンバー全員と結果的に距離が近くなってしまったわけだ。普通なら遠慮して、少し話せたらラッキー位が当たり前のカーストトップグループに、何故かハジメが近い関係にある事もキツイ視線を頂戴している由縁であった。

客観的に見てみれば、いくら香織が高嶺の花とはいえハジメは女子であり、男子が彼女を敵視する理由はない。

しかし、光輝というイケメンと話しているという時点で女子からのやつかみは確実なものとなり、それにつられた男子も何割かいる。また、純粹に超の付く人気者達と近しいが故に嫉妬する者もいるのだろう。

「お、おはよう。八重樫さん、天ノ河くん、坂上くん」

「おはよう、ハジメ。今日もギリギリで来るなんて、相も変わらずのんびり屋さんだね。でも、いい加減香織に甘えてばかりではいけないよ?」

「いやあ、その、朝は弱くて」

愛想笑いをしながら光輝の爽やかスマイルを回避し、曖昧な答えを返す。最早いつもの光景だったりする。そこらの女子なら正面から直視しただけでクラツときそうな微笑みに対し、ハジメは無反応。

初めて会話した時は文武両道なイケメンの笑顔に、確かに少しは「カッコいいな」という女子らしい反応は示した。しかし、光輝の人となりを知る内にむしろ警戒するようになった。

というのもこのイケメン、正義感が強く、何でもそつなくこなす所為か、思い込みがかなり激しいのだ。その思い込み故に自分を疑うという事をせず、それ故にトラブルに巻き込まれる事もあるらしい。常識人である雫の苦勞が偲ばれる。

ちなみにだが、王道系主人公には必ず搭載されている鈍感系スキルはちゃんと常備している。

周囲の視線を気にしつつ、「いい加減席に座りたいなあ」等と考えながら、光輝の無自覚スマイル攻撃をどうにかかわっていたハジメだが、これまた天然お姫様な香織が平然と爆弾を投げ込んでくる。

「？ 私ハジメちゃんと話したいから話してるだけだよ？」

きよとんとした顔でそんな事を平然と宣ってくる香織の所為で、ハジメに対する圧力が更に増したのは言うまでもない。

ハジメがまた一つ溜息を吐いた。

睡魔との闘いに負け、九割方眠って過ごした四限が終わり、皆が待ちに待った昼休み。クラスの者達が思い思いの時間を過ごす中、ハジメは黄色い外箱でお馴染みの栄養食（メープル味）で簡単に済ませ、そのまま昼寝に移行しようとする。

「ハジメちゃん、一緒にご飯食べない？」

だがやはりお姫様は見逃してはくれないらしい。可愛らしい弁当箱を持った香織が、お昼の同席を求めてきた。このまま言う通りにしようものなら、お約束の視線による針の筵となるのは間違いない。「ほんとにどんだけこの人の事好きなんだアンタら!!」と声高に叫びたい。普通に考えれば、男子目線では女子同士の単なるトークに過ぎないというのに、男女問わず睨んでくるのだから本当に恐ろしい。

「ごめんなさい。御覧の通りもう食べちゃったから、私の事は気にしないで良いよ」

「駄目だよそれだけじゃ!!ちゃんと言ったから、私のお弁当、分けてあげるから。ね?」
一瞬にして視線の鋭さが増した。結局針の筵は避けられないらしい。更に不幸な事に、他三人も当然寄ってきて、クラスどころか学校中で人気のトップグループがハジメの席に集まってくるという事態となった。

（いつその事、今ネットで話題の異世界転移でもしないかなあ。この人達）

そんな投げやりな事を考えた、その時。

それは、起こった。

「えっ？」

突如、教室の床の一部が眩い光を放ち始めた。場所はちやうど光輝の足元だ。その光はよく見ると紋様になっていて、きれいな円形の、正しく「魔方陣」という呼び方がぴったりなデザインだ。

「皆さん！早く教室の外に!!急いで！」

いきなりの出来事に硬直する生徒達に、担任である畑山愛子はたやまあいこが叫ぶがもう遅い。

その時には既に輝きを増していく光は教室全体を覆い、床の魔方陣の大きさは完全に教室内をほとんど囲うまでになっていた。

愛子の叫びも虚しく、臨界点に達したかのように爆ぜる光。そして光が収まる頃には………

もはや、誰もいなかった。

残されたのは、食べかけの弁当に、蹴倒された椅子、そして最初から誰もいなかったのではないかと錯覚させるような静寂だけ。

この事件は、白昼に起きた集団神隠し事件として世間を騒がせる事となった。

第1話 歪な世界

目を開けると、そこは白い石造りの神殿だった。

……一体何を言っているのか分からないだろうが、そんな状況に陥っている人達の方が訳が分からないだろう。さっきまで確かに学校の教室にいたのだ。それが、光に包まれたほんの一瞬の間に何故別の、確実に見た事も無い場所に全員移動しているのか。クラスのメンバー全員が思いはそんな困惑と驚愕で統一されていた。

ハジメは視界が明らかになったのと同時に、近くにいる香織に眼を向けた。驚きのあまりへたり込んでいるが怪我などはなさそうな香織の姿を確認して、安堵した後すぐに周囲の確認を行う。

ハジメ達がいるのは、広大な広場の最奥の台座のような場所。周りの他の床より高くなっているそこから見渡す限り、そこは神殿というより大聖堂の方が近いのかもしれない。ドーム状の天井を美しい彫刻が彫られた柱がいくつも支えており、連なる柱だけでなく至る所に見事な装飾が施されていた。

何より目を引くのは、何者かが描かれた巨大な壁画。木々や湖を背景に、金髪を靡か

せた中性的な人物が中央で両手を広げている。まるで全てを包みこみそうな美しく、素晴らしい壁画だ。だがしかし、それを見たハジメは……何か、恐ろしい物を感じた。言葉では表せない、何か薄ら寒い感覚が背筋を這い、咄嗟に視線を別の方向へと逸らす。

そうして移した視線の先には、自分たちの乗っている台座の前にいる人物達。人数はおよそ三十人と云ったところか。皆一様に法衣と思われる衣服を纏い、傍らには錫杖が置かれている。全員、ハジメ達の方を向いて跪き、胸の前で両手を組んで何らかの祈りを捧げている。

大理石に似た質感の広い床の上でざわつく皆を、担任の愛子とクラスのカリスマである光輝が落ち着かせようとする。しかし、そんな混乱の極みにある彼らに、老いた声が投げかけられた。

「ようこそ、トータスへ。勇者様とそのご同胞の皆さま。歓迎致しますぞ。私は聖教協会にて教皇の位置に就いておりますイシユタル・ランゴバルドと申す者」

以後お見知りおきを、と恭しく頭を下げる、強い雰囲気醸し出す他の者よりも豪華な恰好をした老人。彼が言った幾つかの気になる単語に思考を走らせるハジメ。

トータス、勇者、聖教協会……

トータスという地名にも聖教協会という固有名詞にも勿論聞き覚えは無いが、”勇者

”という単語で何となく事態を察してしまった。

(これって……異世界召喚だよね？え、本当に？夢でもドツキリでもなく？うそん……)

どうやら自分達は随分とテンプレートなファンタジー展開に巻き込まれてしまったようだ、と理解して現実逃避したくなるハジメであった。

長机が設置された広い大部屋に案内された一行。

そこでイシユタルから話された事情を要約すると、以下のような事らしい。

まず、この世界は地球とは全く違う”トータス”という世界であり、この世界には三種族が存在する。それが人間族、魔族、亜人族だ。

イシユタル達が該当する人間族は北一帯、魔族は南一帯、亜人族はそのほとんどが東の樹海にてひっそりと暮らしているらしい。

亜人族は身体能力は高いものの、この世界における魔力と、それを使って行使する魔法を持たないが故に、あまり脅威にはならないとイシユタルは語る。問題は魔族の方で、人間族と魔族は長きに渡って戦いを続けているのだという。

魔族は数では劣るが、総じて魔法を行使する能力が人間よりも高く、それ故に平均

的な個の力が人間族を上回っているのである。

人間族の物量と、魔人族の高い能力。この両者の力は長い間拮抗していた。しかし、最近になって魔人族側の力が急に強くなりだした。その原因は、魔人族が魔物と呼称される生物を使役しだした事にある。

元々魔物とは至る所に生息し、それでいてその正体が正確にはわかっていない、人を脅かす強力な害獣。それを操る事は、その素質を持つ者が取り組んでも一、二匹程度が限界だった。しかし、ここに来て魔人族は魔物を戦力として取り入れ始めたのである。

数というアドバンテージを覆された事により、誰もがどうすればいいのかと危機感を感じていた時、イシユタルに天啓が舞い降りた。それは、イシユタル達、そして人間族が信仰する創造神にして守護神であるエヒトからの神託だったのだ。

「あなた方を召喚したのは、エヒト様です。我々人間族が崇める守護神、聖教教会の唯一神にして、この世界を造られた至上の神。おそらくエヒト様は悟られたのでしよう。このままでは人間族が滅びることを。だからこそあなた方を換ばれた。この世界よりも上位の世界からの来訪者であるあなた方は、この世界の人間よりも優れた力を有しているのです」

神託を受けた時の事でも思い出しているのか、恍惚とした表情をしているイシユタルはそのまま言葉を続ける。

「あなた方にはエヒト様の御意思の下、是非ともその力を人間族の為に振るって頂きたい」

イシユタルはハジメ達にそう告げる。生徒達は困惑し、お互いに困惑するばかりだ。それはそうだろう。ファンタジーな展開に釣られそうになるが、イシユタルの言うことを要約すると「戦争をしろ」という事だ。急に連れてこられていきなりそんな事を言われたところで、納得して「はい、わかりました」などと言える訳がない。

そんな全員の総意を代弁するように、クラスの担任である小柄な女性、畑山愛子がイシユタルに向かって抗議した。

「ふざけないで下さい!!結局、この子達に戦争をさせようって事でしょ!!そんなの許しません!ええ、先生は絶対に許しませんよ!!」

湧き上がる怒りのままに吠える愛子。勢いそのままに、早く自分達を帰すように要求する。

愛子は小学生並みの体格故に常に実年齢よりも下に見られがちだが、その小さな体にはいつも一所懸命さが宿っている。生徒が何らかのトラブルに悩んでいる時にも、いつも真っ先に飛び出していくその姿に生徒たちは皆言い様のない信頼と安心感を向けているのだ。

当然この時も「ああ、また愛ちゃんが頑張ってる・・・」とホッコリしていた彼らだっ

たが、次にイシユタルの口から出た返答に表情を凍り付かせる事となった。

「残念ですが、それは不可能です」

「ふ、不可能って……どういふことですか!? 喚べたのなら帰せるでしょう!」

「先程言ったように、あなた方を召喚したのはエヒト様です。我々があの場にいたのは、勇者様方を出迎える為と、エヒト様に祈りを捧げる為。人間に異世界に干渉するような魔法は使えませんのでな。あなた方が帰還出来るかどうか、全てはエヒト様の御意思次第という事ですな」

「そ、そんな……」

イシユタルから告げられた事実、脱力して座り込む愛子。大半の生徒達もパニックになり、混乱のままただ喚く者、呆然とする者、イシユタル達に罵倒を浴びせる者に分かれていった。

そんな中、ハジメも当然ショックを受けていたもののどうにか平静を保っていた。培ったオタク知識の賜物だろう。フィクションではよくある、召喚された途端に迫害か冷遇を受けるといったパターンではなかったかと若干安堵していた。

そんなハジメはイシユタルに眼を向け観察に努めていた。

そして、気付く。イシユタルが、未だ混乱して騒ぐ生徒達に向ける眼に、軽蔑の色を浮かべていることに。顔は平常そのものといった感じで微動だにしないが、ハジメには

むしろそれが湧き上がる憤慨を抑えているように思えてくる。

先程の神託を思い出していた時の表情から、彼のエヒトへの信仰心が山より高く海より深い事が伺えるし、今回に關してはさぞかし希望と幸福を胸に宿して出迎えに励んでいた事だったろう。そんな彼からしてみれば、目の前で喚き続けている少年少女達に對して、「何故、エヒト様に選ばれておいて喜ぶことが出来ないのか」という思いを抱いているのは想像に難くない。

ハジメの中で教皇・イシュタルに對する警戒心が高まってく中、事態が動いた。クラスのカリスマ・光輝がバンツとテーブルを叩いて立ち上がったのだ。自然、静まり返つて視線を光輝に向けるクラス一同。イシュタルに關しては、何処か嬉しそうに見える。

イシュタルがクラスの中心人物である光輝に注意を向けつつ、魔人族の話をする際には彼らの残忍さといった部分を殊更強調して話していたのを、ハジメは気付いていた。

ハジメの胸中に嫌な予感が充満していく。そして、光輝は告げる。かなり”予想通り”な言葉を。

「皆、今ここでイシュタルさんを責めても仕方ない。彼にだってどうしようもないんだ」
光輝はそこで一度切り、そして決然とした表情で、皆に告げる。その顔には紛れもない正義感が漲っているのがわかった。

「……俺は、俺は戦おうと思う。実際にこの世界の人たちは苦しんでいるんだ。放つてはおけない。それに、もし魔族達を倒す事が出来たなら、元の世界にも帰れるかもしれない。そうですね、イシユタルさん」

「……確かに、エヒト様が救世主の願いを無碍にするとも思えませんか」

「さつきから何だか力が体の底から溢れてくるような感じがするんです。呼ばれたからには、俺達には何か大きな力があるんですよ?」

「ええ、そうです。この世界の人間と比べると、およそ数倍から数十倍の力があると考えていいでしょうな」

「うん、なら大丈夫。俺は戦う。人々を救い、皆が家に帰れるように。俺が世界も皆も救ってみせる!!」

拳を握り、そして何故か歯もキラリと光らせて、力強く宣言する光輝。そんな彼に、クルスの大半は一樣にして希望の籠った眼差しを向けだす。完全に、全員で戦争への参加を表明する流れだ。主に、光輝に引つ張られる形で。

愛子が光輝を諫めて説得しようとするが、光輝の幼馴染みが声を挙げた事で寸前に遮られてしまう。

「へっ、お前ならそういうと思ったぜ。お前一人じゃ心配だからな。……俺もやるぜ?」

「龍太郎……」

「今のところ、それしかないんでしょ? 気に食わないけど、私もやるわ」
「雫」

「えっと、雫ちゃんがやるなら、私もやるよ!!」

「香織」

龍太郎は如何にも脳金らしい口ぶりで、雫は今のところはそれ以外に方法がない為に仕方なく、香織は雫に追随する形で、それぞれに光輝の決断に賛同する。そんな彼らを見て、他のクラスメイト達も光明を見出したように、悪く言えば流されるように光輝達に続いていく。

愛子が必死に止めようとしているが、一度決まってしまった流れは変えられない。ハジメは心情としては戦争などごめんだが、それを主張した所で意味がない事を悟り、黙っている事しか出来ない。

光輝は自分が及ぼした影響についてはそこまで深く考えておらず、仲間達クラスメイトの賛成もほとんど自身で決断したのだと解釈し、

「皆、ありがとう。魔族を倒して、世界を救おう。そして、皆で一緒に帰るんだ!!」
そんな事を言うのだった。

その後、イシュタル達に説明を受けながら連れられて行く一行。イシュタルによると、光輝達が召喚された聖堂は「神山」という山の頂上にあるのだそうで、これから山の麓の王都にて王との目通りをおこなうのだという。

山を下りて麓の王城へと案内され、そこで今いる「ハイリヒ王国」の国王やその家臣といった重鎮達に加え、王族との謁見は滞りなく進んでいく。

ちなみに、国王の名はエリヒド・S・B・ハイリヒ、王妃はルルアリア、王女はリリアーナ、王子はランデルというのだが、この内ランデル王子は香織に一目惚れしたようでしきりに話しかけ、クラスの男子達がやきもきするという事があつた事を記しておく。

その夜、用意された自室にて、ハジメはベットに寝転がりながら、今日の事を一つずつ整理していた。

(宗教と神が支配する国、かあ……)

王城への道中にて見た、イシュタルの唱えた詠唱によって稼働した、山頂とその麓を繋ぐ魔法式ロープウェイとでも呼ぶべき天空回廊や、王城にいた物語から飛び出したような王族達も、王城に何人もその姿を見る事が出来た甲冑の騎士達も、どれもが日本ではお目に掛かれないようなファンタジーだった。

だがそれよりもハジメが目にしたのが、謁見に入る前のイシュタルと、国王・エリヒ

ドのやり取りの際、エリヒドがイシュタルに跪いていた事だった。

その事から、少なくともこの国では国王より教会の教皇の方が地位が上である事は明白である。つまり、この国を動かしているのは国王を含む王城の重鎮達ではなく、聖教教会であるという事だ。

何となく、戦前の日本を思い起こさせる事実だ。政治と宗教が密接に絡む在り方が、悲劇を生まなかったとは言えない。

まして、この世界には実際には神が存在しているのだ。誰も見た事はないだろうが、天啓と神託を与えて人を動かし、超常の力を振るい、実際に別世界から三十人も人間を呼び出した、正しく人智を超えた存在が。

ハジメは、あの聖堂で見た美しくも恐ろしい絵を思い出し、身をブルリと震わせた。

「……………寝よう」

毛布を頭まで被り、ベットの中に身を沈める。窓のカーテンから漏れる光だけが、部屋の中を照らしている。

(父さんと母さん、心配してるかな……………)

日本にて自分の安否を憂いているだろう両親を想いながら、深い眠りに就くハジメ。明日突きつけられるシビアな現実を知る事もなく、朝までぐっすりと眠るのだった。